

大学生の心理実習に対する学びと期待

廣 橋 諒 一

1. 問題と目的

1-1. 国家資格としての公認心理師資格

心理専門職初の国家資格となる公認心理師法が2015年9月9日に成立し、2017年9月15日に全面施行された。社会が刻々と変化していく中で不登校や引きこもり、虐待、DV、休職などさまざまな心の援助が必要とされる場面が増加し、国民の心の健康問題に対する関心、援助の必要性が高まってきた中で公認心理師が誕生した。公認心理師は「国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的」として、すでに第5回までの公認心理師試験が行われている。一般財団法人日本心理研修センター（2022）によると、試験合格者数は延べ72,133名となり、資格登録を行った者は2022年9月末日現在で57,645名となっている。

これまでの心理専門職といえば民間資格である臨床心理士資格がある。多様な領域において認知され、心理職としての採用資格要件として扱われることも多かった。臨床心理士の資格認定開始は1988年からであり、2022年4月1日現在で39,576名が認定されている。しかし、すでに公認心理師資格取登録得者数の方が多くなっている。それは公認心理師法施行後5年間までの間は特例措置として、心理の実務経験を有する者は現任者講習を受けることによって公認心理師の受験資格を得ることができたためと考えられる。そのため、臨床心理士の資格を持たないものや看護師や保健師、教師など心理近接領域の専門職であっても心理業務を行っていることに該当すると認められる場合には、所定の手続きを踏むことで受験することができ、瞬間に公認心理師の資格登録者数が増えたと考えられる。5年間の経過措置が終了し、今後は通常の公認心理師受験資格ルートが基本となるため、ある程度一定の受験者数に落ち着いていくと考えられる。それは、その基本ルートの原則が4年制大学において公認心理師法施行規則第1条で定める科目を履修することが前提となっており、加えて大学院において定められた科目を履修する、もしくは施行規則第5条で定める

施設において定められた期間以上の実務経験を行うことで受験資格を得ることができるためである。これまでの臨床心理士資格であれば、大学院において指定されたカリキュラムを履修し、修了することで臨床心理士受験資格を得ることができ、大学での学びは受験資格の必須要件には含まれていなかった。しかし、公認心理師では、例外として公認心理師と同等以上の知識及び技能を有すると認定された者の受験資格ルートを除けば、4年制大学での定められた科目の履修が必須要件になっており、4年制大学と大学院でのあわせて6年間の養成カリキュラムの履修が必要となったことはこれまでとの大きな違いである。加えて、4年制大学の間から実習演習科目が設定されており、保健医療領域を必須とした学外実習の実施が求められている。大学によってはこれまでから学外施設等での実習やボランティア活動などを大学独自の体験的なカリキュラムの一部として取り入れていたところもあるかもしれないが、資格要件としての実習科目として位置づけられるのは初めてのことである。そのため、多くの大学において大学院生に対する臨床心理実習指導ノウハウは持ち合わせていても、大学生に対する実習指導についてはまだ始まったばかりといえる。

1-2. 心理実習の位置づけ

心理実習は、公認心理師法施行規則第1条の2において定められた、大学における公認心理師となるための指定25科目の内の一つであり、公認心理師カリキュラム等検討会（2017）において表1のように分類、検討されてきた。

1～6にあたる「心理学基礎科目」では、心理に関する支援を要する者やその関係者の支援基盤となる心理学や臨床心理学の知識習得だけでなく、統計法や研究法での学びを通して科学的思考による問題解決能力を身につけていくことが示されている。加えて「公認心理師の職責」は公認心理師としてのアイデンティティを磨く根幹部分であり、公認心理師を目指す上での基礎科目といえる。7～23にあたる「心理学発展科目」では「基礎心理学」の他に公認心理師が働く保健医療・福祉・教育・司法犯罪・産業労働の主要5分野を想定した「実践心理学」、他職種や地域と連携し、チームアプローチを想定した「心理学関連科目」が設定されていると考えられる。そして、心理実習の含まれる24～25にあたる「実習演習科目」では、これまでの学びで得た知識を演習や実習を通して現場での学びと結び付け、実践に生かすことのできる力として身につけていくことが求められているといえる。

したがって公認心理師となるために必要な科目は心理学の基礎分野から始ま

表1. 大学における公認心理師となるための指定25科目

省令に定める科目名	
A.心理学基礎科目	1. 公認心理師の職責
	2. 心理学概論
	3. 臨床心理学概論
	4. 心理学研究法
	5. 心理学統計法
	6. 心理学実験
B.心理学発展科目	7. 知覚・認知心理学
	8. 学習・言語心理学
	9. 感情・人格心理学
	10. 神経・生理心理学
	11. 社会・集団・家族心理学
	12. 発達心理学
	13. 障害者・障害児心理学
	14. 心理的アセスメント
	15. 心理学的支援法
	16. 健康・医療心理学
	17. 福祉心理学
	18. 教育・学校心理学
	19. 司法・犯罪心理学
	20. 産業・組織心理学
心理学関連科目	21. 人体の構造と機能及び疾病
	22. 精神疾患とその治療
	23. 関係行政論
C.実習演習科目	24. 心理演習
	25. 心理実習（80時間以上）

り、臨床実践に関わる分野や心理学に関わる関連分野など幅広い内容を習得することになる。そして、心理実習によってそれらの学びを実践と結び付けていくことになる。

1-3. 心理実習とは

文部科学省・厚生労働省（2017）は、「公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について」の通知において、心理実習の実習時間数を80時間以上とするように示している。また、実習分野については主要5分野といわれる保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、

産業・労働に関する施設において、見学等による実習を行いながら当該施設の実習指導者又は実習担当教員による指導を受けるように示し、医療機関での実習を必須としている。80時間以上の実習時間には実習先での見学等実習だけでなく、そのための事前学習や事後学習などといった時間も含まれている。そのため、医療機関での実習を必須としながらどのような心理実習のプログラムを検討するかは各大学の特色によって異なってくると考えられる。

そして、文部科学省・厚生労働省（2017）は心理実習に含まれる事項を表2のとおり求めている。

表2. 心理実習に含まれる事項

①実習生が、次の（ア）から（ウ）までに掲げる事項について、主要5分野の施設（具体的な施設については、「公認心理師法施行規則第三条第三項の規定に基づき文部科学大臣及び厚生労働大臣が別に定める施設」（平成29年文部科学省・厚生労働省告示第5号）のとおり。）において、見学等による実習を行いながら、当該施設の実習指導者又は実習担当教員による指導を受けるべきこと。

ただし、当分の間、医療機関での実習を必須とし、医療機関以外の施設における実習については適宜行うこととしても差し支えないこと。

②実習担当教員が、実習生の実習状況について把握し、次の（ア）から（ウ）までに掲げる事項について基本的な水準の修得ができるように、実習生及び実習指導者との連絡調整を密に行う。

（ア）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ

（イ）多職種連携及び地域連携

（ウ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解

心理実習では、（ア）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ、（イ）多職種連携及び地域連携、（ウ）公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 について、医療機関での実習を必須としながら「見学等による実習」を行い、指導を受けるように示している。大学院では心理に関する支援を要する者やその関係者と直接関わる実習が求められている一方で、大学での実習は「見学等による実習」とされている。これは、大学段階では現場に触れ、そこがどのような場でどのようなことが実際行われているのか、公認心理師がどのように現場の中で活動しているのかといった点をまずは見学を通して学ぶことが求められていると考えられる。大学院においては、大学の実習で求められている（ア）～（ウ）の他に、「（1）心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得」として「①コミュニケーション、②心理検査、

③心理面接、④地域支援 等」の他に、「(2) 心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成」が求められている。つまり、大学では他職種との連携やチームアプローチ、職業倫理といった公認心理師が活動する環境についての学びを重視し、大学院ではそれらに加えて心理の支援を要する者等への具体的な支援についての学びも修得すべき事項として示されている。

このような背景の違いから、実習を通してそれまでの座学での学びと実習での実践的な学びを結び付けていくことが重要であり、これまでの講義内容の十分な振り返りを行い、実習実施にあたっての問題意識、目的意識を学生に持たせ、積極的、主体的に実習に取り組む実習教育が求められているといえる。

1-4. 心理実習における現状と課題

心理実習をどのように行っていっていったらよいか各大学試行錯誤を行っている。石田ら（2022）は、久留米大学での心理実習の開講から実施までの取り組みをまとめてその現状と課題を報告し、大学院での実習科目である心理実践実習との連携を今後の課題に挙げている。永田ら（2022a）は、心理実習導入初年度の取り組みについてCOVID-19の影響を受けながらも主要5分野でどのように取り組んできたのかを報告し、見学実習と関与観察実習による実習体験を通して学生が困難に直面しながらも心理支援のあり方を主体的に捉えようとしていたこと、学生の公認心理師を目指すモチベーションを高める実習プログラムの構築が今後の課題であったことを述べている。上田（2022）も心理実習の準備状況から運用状況までを報告し、実習受入人数の課題やカリキュラム内の位置づけ、人的資源、オンラインツールを用いた業務の効率化、学生対応、成績評価、実習施設の確保を今後の課題として挙げ、心理実習の運用について各大学で情報を共有していくことで今後の心理実習のより良い仕組みづくりが重要であると述べている。このように各大学での実践や課題について徐々に報告がされ始めている。

また、心理実習の学びのあり方についても検討されている。波多野（2019）は、大学での心理演習、心理実習、そして大学院での心理実践実習での学びの関連性と連続性を図式化し、心理演習において現場を捉える観点を養うことで、心理実習において現場に触れて実際の業務イメージを形成することができ、その後の心理実践実習に繋がることを指摘している。また、心理演習や心理実習を通して、「実践活動を行なっていく際の態度、相手と関わっていくために求

められるコミュニケーションに関する技能、自分自身の心の動きを感知しモニターしていける技能、相手とのかかわりの中で生じてくる現象について捉えていける参与観察についての技能等に加えて、社会的活動を行う高度専門職としての倫理意識についての学習などが基礎になるであろう」と述べている。岩山（2021）も、心理実習に求められる学びのあり方を検討し、見学を中心として医療機関を含む多くの領域での連携や職業倫理、法的義務の実際を体験的に学ぶことが期待されると述べ、見学ありきではなく、これまでに学んだ知識への理解を深める機会となるように実習運営や指導を行っていく必要があることを述べている。さらに分野共通のコアスキルを養成するための連携教育の実施も学びのあり方のポイントとして指摘している（岩山、2022）。

それでは、心理実習を受講している学生は実習からどのような経験をしているのであろうか。上田（2002）は実習実施後の学生の反応として、公認心理師が働く現場での実際の業務を知ることができた意義に関する反応が最も多かったことを述べている。そして、施設への感謝や実習指導者の振る舞い、オンライン型実習のメリットに関する反応の他に、心理援助職の実際やその厳しさから改めて心理援助職を目指すかどうかの進路選択を考える機会になったといった反応もあったことを述べている。また、永田ら（2022b）は、心理実習を終えた学生にインタビュー調査を行い、心理実習へのモチベーションに関わる要因について検討した結果、実習環境がモチベーションの向上にも低下にも影響していたことを述べている。そして、心理実習が成長や職業選択の機会になっており、心理師としてのアイデンティティを形成するきっかけとなり、心理師としての将来像をイメージすることにつながっていたことも報告している。これらの先行研究から学生にとって心理実習は、公認心理師の実際の業務を知ると同時に進路選択にも影響を与えていると考えられる。

しかし、これらのような学生がどのような学びを得ていたのかという先行研究は臨床心理士養成のための大学院生を対象とした研究が中心で、大学生を対象とした研究はこれまでほとんど行われていない。現状では先述の心理実習の運用方法や各大学の取り組みに関する実践報告が中心となっている。そのため、ユーザーとしての学生を対象とし、心理実習からどのような学びを得ていたのかを知ることは、今後の心理実習のあり方を考える上で重要と考える。

そこで本研究では心理実習を経験した大学院生を対象にインタビュー調査を行い、大学生が心理実習に何を期待し、どのような学びを得ていたのかを明らかにすることで、今後の心理実習のあり方について検討することを目的とする。

2. 方法

2-1. 調査対象

近畿圏の臨床心理学を専攻している大学院修士課程1年生8名を対象とした。調査協力者の「性別」、「年代」、「実習領域」、「実習形式」をまとめたものを表3に示した。なお、調査対象者はCOVID-19の影響により、本来実習先へ訪問して行う実習が一部オンラインでの実習に変更されていた。

表3. 調査協力者

	調査協力者	性別	年代	実習領域	実習形式
1	Aさん	女性	20代	保健医療・福祉・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
2	Bさん	男性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
3	Cさん	女性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
4	Dさん	男性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
5	Eさん	男性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
6	Fさん	女性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
7	Gさん	男性	20代	保健医療・福祉・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習
8	Hさん	女性	20代	保健医療・教育・産業労働	見学実習、 一部オンライン実習

2-2. 調査時期

X年12月

2-3. 調査方法

本研究では、インタビューによる調査を行った。調査協力者に、本研究の趣旨、実施手順、倫理的配慮を書面にて提示するとともに口頭にて説明を行った。研究に協力いただける場合には、同意書に署名をもらった。インタビューは、

大学の研究室などプライバシーが確保できる場所で実施した。その後、性別、年齢、実習領域を聴取し、リサーチクエスションに基づき、半構造化面接を行った。

①リサーチクエスション

「大学生が心理実習に対してどのような期待を持ち、学びを得ているのか」

②質問項目

「心理実習を受講するにあたりどのようなことを期待していたか」

「心理実習を通して学びになったことについて」

2-4. 分析方法

インタビュー内容については、調査対象者の同意のもとICレコーダーで録音した。録音されたインタビューの音声データはすべて逐語化し、佐藤（2008）の質的分析方法を用いて、調査対象者ごとに定性的コーディングを行い、継続的比較法による分析を行った。

3. 結果

インタビュー内容を分析した結果、『実習に対する期待』、『実習での学び』、『実習に対する期待と学びのズレ』、『実習体験の影響』の4つの大カテゴリーに分類された。そして各大カテゴリーにおける内容について分析を行った結果、以下の通りであった。結果中の「」は調査協力者の発言を示す。

3-1. 実習に対する期待

『実習に対する期待』は、『臨床現場の観察』、『多職種との関わり方』、『働く環境自体の観察』、『臨床現場のニーズの理解』、『事例を通じた学び』の5つのカテゴリーが抽出された。その結果を表4にまとめた。

1) 臨床現場の観察

『臨床現場の観察』については以下の通りであった。

Aさんは、「心理師のそれぞれの立ち位置とか。どのようにその時はあんまり、まあ勉強はしてますけど、実際にどのようにクライアントさんと子ども達に関わっていくのかっていうのが実際の場面ではあんまりイメージできてなかったんで、そういうのをこう実際の現場で見て学んでいきたいなあっていう

表 4. 実習に対する期待

1) 臨床現場の観察

Aさん	A1	心理師のそれぞれの立ち位置とか。どのようにその時はあんまり、まあ勉強はしてますけど、実際にどのようにクライアントさんとか子ども達に関わっていくのかっていうのが実際の場面ではあんまりイメージできてなかったんで、そういうのをこう実際の現場で見て学んでいきたいなあっていうのがありました
Cさん	C1	先生とかは除いて働いているカウンセラーさん、会ったことなかったんで、そういう人達がどういうことをその外の職場とか現場でやっているのかっていうことを肌で感じられたらなっていうのをその講義とかじゃなくて、自分の目で見てそういう体験ができればなあっていう風に思った
Gさん	G1	実際どうやって関わられているかというか、分野ごとになんか人の動きとていうかそういうのが違うんだろうなっていうのは思ってたので分野ごとに違う、その分野ごとの違いっていうのを見れることを期待していました

2) 多職種との関わり方

Dさん	D1	協働に関してはもう働く場所とか働く分野とか、まあそこで働いてる人たちによっても全然やり方違うしなっていうのはずっと思ってたので、そういうところを知りたいなっていうのがありました
Eさん	E1	心理職がその実際に見学に行ったところではどういう働きをしているのかとか、実際お医者さんとかその他のスタッフさんとかとどういう関係を持っているのかとか
Hさん	H1	実際どんな流れで心理師さんが働いているんだとか、連携って言っても連携？みたいな。どういう風に多職種と関わってるのかっていうのが具体的に自分の中では全然身についていなかったんで、なんかその雰囲気、実習の現場ではどういう風な動きをしているのかっていうのを知ること

3) 働く環境自体の観察

Bさん	B1	実際の面接室がどうなっているだとか、病院の作りとしてこうなってるみたいなどころにはいっさい足を踏み入れてこなかったんで、そういったところに対する期待
-----	----	--

4) 臨床現場のニーズの理解

Eさん	E2	学校とか教育の場でもどういうことを求められているのかとか、その心理職が。そういうニーズについても学びたいなって
-----	----	---

5) 事例を通した学び

Fさん	F1	病院とかスクールカウンセリングであつたりとかっていうその領域ごとの専門的な事例みたいなものを知っていくのかなっていう風に思っていました
-----	----	---

のがありました」(A1)と述べている。Cさんは、「先生とかは除いて働いているカウンセラーさん、会ったことなかったもので、そういう人達がどういうことをその外の職場とか現場でやっているのかっていうことを肌で感じられたらなっていうのをその講義とかじゃなくて、自分の目で見てそういう体験ができたらなあっていう風に思った」(C1)と述べている。Gさんは、「実際どうやって関わられているかというか、分野ごとになんか人の動きというかそういうのが違うんだろーなーっていうのは思ってたので分野ごとに違う、その分野ごとの違いっていうのを見れることを期待していました」(G1)と述べていた。

2) 多職種との関わり方

『多職種との関わり方』については以下の通りであった。

Dさんは、「協働に関してはもう働く場所とか働く分野とか、まあそこで働いてる人たちによっても全然やり方違うしなっていうのはずっと思ってたので、そういうところを知りたいなっていうのがありました」(D1)と述べていた。Eさんは、「心理職がその実際に見学に行ったところではどういう働きをしているのかとか、実際お医者さんとかその他のスタッフさんとかとどういう関係を持っているのかとか」(E1)と述べている。Hさんは、「実際どんな流れで心理師さんが働いているんだとか、連携って言っても連携？みたいな。どういう風に多職種と関わってるのかっていうのが具体的に自分の中では全然身についていなかったで、なんかその雰囲気、実習の現場ではどういう風な動きをしているのかっていうのを知ること」(H1)と述べていた。

3) 働く環境自体の観察

『働く環境自体の観察』については以下の通りであった。

Bさんは、「実際の面接室がどうなっているだとか、病院の作りとしてこうなってるみたいなのところにはいっさい足を踏み入れてこなかったで、そういったところに対する期待」(B1)と述べていた。

4) 臨床現場のニーズの理解

『臨床現場のニーズの理解』については以下の通りであった。

Eさんは、「学校とか教育の場でもどういうことを求められているのかとか、その心理職が。そういうニーズについても学びたいなって」(E2)と述べていた。

5) 事例を通した学び

『事例を通した学び』については以下の通りであった。

Fさんは、「病院とかスクールカウンセリングであったりとかっていうその領域ごとの専門的な事例みたいなものを知っていくのかなっていう風に思っていました」(F1)と述べていた。

3-2. 実習での学び

『実習での学び』は、『臨床現場のイメージの変化』、『臨床現場のニーズの理解』、『臨床現場の実情』、『臨床現場のイメージ化』、『臨床現場におけるルール』、『多職種との関わり方』の6つのカテゴリーが抽出された。その結果を表5にまとめた。

1) 臨床現場のイメージの変化

『臨床現場のイメージの変化』については以下の通りであった。

Dさんは、「メンタルのケアをされて 働いていた先生の話聞いた時になんか自分のイメージだと産業の中に心理が入ったのってめっちゃ最近やったイメージやったんですけど、でかい企業ってそんな前からちゃんとやってたんやとか、あとは単純にその企業だと多分教育とか医療とかっていうところよりもなんて言うんですかね、なんか会社と近いなっていうイメージ、印象が自分は話聞いててありました」(D2)と述べていた。Fさんは、「カウンセリング室に入ってカウンセリングを行ってみたいかならなかったの、心理師がカウンセリングとテスター以外の仕事をしているってことを初めて知ったっていう部分もありましたし、それが私の前提と考えていたこととはまるっきり違ったっていう驚きみたいな形で理解するまでに丸一年かかったみたいな感じはありました。なぜ、どうしてみたいなのはずっと続いていて、実習を重ねていく内にカウンセリングじゃない仕事もあるんだということをようやく分かった」(F2)と述べていた。Hさんは、「多職種連携とか協働とかは勉強してんですけど、何か目的のために治療とかそういうチームとしての目的の為に集まって、なんか関係して作ってるのかなと思ったら、実際に現場に行ったら本当に心理師さんとお医者さんが仲良かったり、友達のように仲良かったりしてたので、なんか多職種でもこうすごい和気あいあいとしている関係性の職場もあったので、なんかその機械的な感じじゃないっていうのがちょっと違いました。なんかそこは自分の想像とは」(H3)や、「大学病院とか総合病院とかのようなところ

表5. 実習での学び

1) 臨床現場のイメージの変化

Dさん	D2	メンタルのケアをされて 働いていた先生の話聞いた時になんか自分のイメージだと産業の中に心理が入ったのってめっちゃ最近やったイメージやったんですけど、でかい企業ってそんな前からちゃんとやってたんやとか、あとは単純にその企業だと多分教育とか医療とかっていうことよりもなんて言うんですかね、なんか会社と近いなっていうイメージ、印象が自分は話聞いててありました
Fさん	F2	カウンセリング室に入ってカウンセリングを行ってみたい形じゃなかったの、心理師がカウンセリングとデスター以外の仕事をしているってことを初めて知ったっていう部分もありましたし、それが私の前提と考えていたことはまるっきり違ってたっていう驚きみたいな形で理解するまでに丸一年かかったみたいな感じはありました。なぜ、どうしてみたいのがずっと続いていて、実習を重ねていく内にカウンセリングじゃない仕事もあるんだということをようやく分かった
Hさん	H3	多職種連携とか協働とかは勉強してんですけど、何か目的のために治療とかそういうチームとしての目的の為に集まって、こうなんか関係して作ってるのかなと思ったら、実際に現場に行ったら本当に心理師さんとお医者さんが仲良かったり、友達のように仲良かったりしてたので、なんか多職種でもこうすごい和気あいあいとしている関係性の職場もあったので、なんかその機械的な感じじゃないっていうのがちょっと違いました。なんかそこは自分の想像とは
Hさん	H4	大学病院とか総合病院とかのようなところだと、心理師さんがずっとカウンセリングとか心理検査ばかりしてるのかなと思ってたんですけどそうじゃないし、なんか他にもいっぱい役割を持ってらっしゃって。そのカンファレンスに出るのもそうだし、ベッドサイドに行ってるカウンセリングとか、そういうのは自分の事前学習では想定していなかったことだったんでそこはすごい違いがありました

2) 臨床現場のニーズの理解

Aさん	A2	例えば多職種連携とかどうやってやっていくのかっていうその心理師さんだけの話じゃなく、看護師さんとかからも含めてどういう風に行っていかないとまずとかいう話とか、あとはそれこそ立ち位置、どうやってやっていくかみたいなんは医療系では学べたかなと思っています。教育とかもお話の中で、その先生とかが心理師に何を求めているのかみたいな話があったりした時に、あ、こういうことを求められてるんだなみたいな。教育現場と医療現場で結構やっぱ求められていることが違うねんみたいなのを学んだかなと思います
Eさん	E3	実際、施設に行くことでそこの職員さんがどんな風に働いているのかとか、あとはその職員さんに実際に自分達で質問することで、心理職がどんなことを求められているのか、どんな働きが求められているのかっていう風なことを知ることができたので自分なりに学びたかったことは学べた

3) 臨床現場の実情

Bさん	B2	私がある心理実習で参加したタイミングというのはコロナ禍も被ってたので、例えばコロナ禍に実際にぶち当たったところで、総合病院であったり、医療機関っていうのがどういう風に動いてて、その中で心理の専門職っていうのは何ができるんだっていう、すごいなんて言うんですかね。その瞬間でしか聞けないリアルな声っていうのを学べたのはすごく大きかった
-----	----	---

4) 臨床現場のイメージ化

Cさん	C2	実際見て、こういう所で心理師って働くんだっていう風にイメージがすごいできやすくなった
-----	----	--

5) 臨床現場におけるルール

Gさん	G2	実習先ごとにそこで独自のルールみたいなのがあったり、なんか独自で行われている支援方法とかっていうのがあったりして、そういう意味で独自のことが知れたりっていうのがあった
-----	----	---

6) 多職種との関わり方

Hさん	H2	多職種連携と言ってもその皆が、そのいろんな個性豊かなメンバーがいるので、心理師さんがその中でどううまくやっていくかっていう伝え方とか接近の仕方とか、そういう事を調整されながらやってるっていうのを現場の心理師さんからもお伺いしたので、そういうこと自分も考えていかないといけないっていうのがためになりました
-----	----	---

だと、心理師さんがずっとカウンセリングとか心理検査ばかりしてるのかなと思ってたんですけどそうじゃないし、なんか他にもいっぱい役割を持ってらっしゃって。そのカンファレンスに出るのもそうですし、ベッドサイドに行ってカウンセリングするとか、そういうのは自分の事前学習では想定していなかったことだったんでそこはすごい違いがありました」(H4) と述べていた。

2) 臨床現場のニーズの理解

『臨床現場のニーズの理解』については以下の通りであった。

Aさんは、「例えば多職種連携とかどうやってやっていくのかっていうその心理師さんだけの話じゃなく、看護師さんとかからも含めてどういう風にやっていってますとかいう話とか、あとはそれこそ立ち位置、どうやってやっていくかみたいなんは医療系では学べたかなと思っています。教育とかもお話の中で、その先生とかが心理師に何を求めているのかみたいな話があったりした時に、あ、こういうことを求められてるんだなみたいな。教育現場と医療現場で結構やっぱ求められていることが違うねんなみたいなのを学んだかなと思います」(A2) と述べていた。Eさんは、「実際、施設に行くことでそこでの職員さんがどんな風に働いているのかとか、あとはその職員さんに実際に自分達で質問することで、心理職がどんなことを求められているのか、どんな働きが求められているのかっていう風なことを知ることができたので自分なりに学びたかったことは学べた」(E3) と述べていた。

3) 臨床現場の実情

『臨床現場の実情』については以下の通りであった。

Bさんは、「私がその心理実習で参加したタイミングっていうのはコロナ禍も被ってたので、例えばコロナ禍に実際にぶち当たったところで、総合病院であったり、医療機関っていうのがどういう風に動いてて、その中で心理の専門職っていうのは何ができるんだっていう、すごいなんて言うんですかね。その瞬間でしか聞けないリアルな声っていうのを学べたのはすごく大きかった」(B2) と述べていた。

4) 臨床現場のイメージ化

『臨床現場のイメージ化』については以下の通りであった。

Cさんは、「実際見て、こういう所で心理師って働くんだっていう風にイメー

ジがすごいできやすくなった」(C2)と述べていた。

5) 臨床現場におけるルール

『臨床現場におけるルール』については以下の通りであった。

Gさんは、「実習先ごとにそこで独自のルールみたいなのがあったり、なんか独自で行われている支援方法とかってというのがあったりして、そういう意味で独自のことが知れたりっていうのがあった」(G2)と述べていた。

6) 多職種との関わり方

『多職種との関わり方』については以下の通りであった。

Hさんは、「多職種連携と言ってもその皆が、そのいろんな個性豊かなメンバーがいるので、心理師さんがその中でどううまくやっていくかっていう伝え方とか接近の仕方とか、そういう事を調整されながらやってるっていうのを現場の心理師さんからもお伺いしたりしたので、そういうこと自分も考えていけないといけないっていうのがためになりました」(H2)と述べていた。

3-3. 実習に対する期待と学びのズレ

『実習に対する期待と学びのズレ』は、『臨床現場の観察』、『心理師からの話』、『自己理解のための体験的学習』、『段階的実習の希望』、『臨床現場のニーズの理解』の5つのカテゴリーが抽出された。その結果を表6にまとめた。

1) 臨床現場の観察

『臨床現場の観察』については以下の通りであった。

Aさんは、「例えば私、福祉行った時に、なんかこうやっぱり大変やろうっていうのもあるんですけど、子どもがいない時間とかになると実際のまゝ話は色々聞けるんですけど、実際のどういう様子なんかなっていうのは、あんまり、まゝ現場見て教えてもらってるんで、分かりやすいっちゃ分かりやすいですけど、イメージはそのあまりしにくいっていうか難しい」(A4)と述べていた。

Bさんは、「どうしてもその施設が業務を終えた時間に、終えた後の時間にお邪魔してお話を聞くっていうのがほとんどだったので、そうですね、実際にその施設が稼働している様子っていうのは学部の内に見れたら、それほど贅沢なことはなかったのかなっていう風には思いますね」(B3)と述べていた。Cさんは、「産業領域の実習っていうのが説明だけみたいになったのが、まゝ

表6. 実習に対する期待と学びのズレ

1) 臨床現場の観察

Aさん	A4	例えば私、福祉行った時に、なんかこうやっぱり大変やろうっていうのもあるんですけど、子どもがいない時間とかになると実際のまあ話は色々聞けるんですけど、実際のどういう様子なんかなってというのは、あんまり、まあ現場見て教えてもらってるんで、分かりやすいっちゃ分かりやすいですけど、イメージはそのあまりしにくっていうか難しい
Bさん	B3	どうしてもその施設が業務を終えた時間に、終えた後の時間にお邪魔してお話を聞くっていうのがほとんどだったので、そうですね、実際にその施設が稼働している様子っていうのは学部の内に見れたら、それほど贅沢なことはなかったのかなっていう風には思いますね
Cさん	C4	産業領域の実習っていうのが説明だけみたいになったのが、まあしょうがないんですけど、なんかこれから心理って職場とかに入っていけたらいいなって思っているんで。そういう実際職場とかで心理師がどういうことをやっているのかっていう、実際の現場を見れたら良かったなって
Dさん	D3	一番いいのは実際にどう活動しているかを見れたらよかったのかなっていうのがありますかね。実際、その利用者さんとかと対応している姿とかを見たら、まあ実際にやってないとはいえ、ある程度現場の雰囲気も感じることができるし。自分ももし教育の分野で働きたいと思って、医療現場のそういうのを見たら、またちょっと自分の考えが変わるかもしれない、そういうきっかけとかになると思うんで。だから、実際に働いている姿を見れたら良かったかな
Fさん	F3	もうちょっとどういう介入しているとか、どういうオリエンテーションをその機関は引き継いで関わっているのかみたいな形があるのを知れたら良かった
Gさん	G3	講義でこんな感じでって言われてその写真だけを見てる状態じゃイメージが付きづらいので、そういう意味で実際に現場っていうのを見せでもらったら、もう少し学べたのかなっていうのはあります
Hさん	H5	芸術療法とかその他のなんかその心理療法じゃないんですけど、ちょっとメインではないんですけど音楽療法とかそういうのもなんか福祉領域では老人ホームとかでその音楽療法やってたりしたら、そういうのもなんか学べたらいいなとか

2) 心理師からの話

Aさん	A3	スクールカウンセラーさんの話がなかったような気がします。なんか教育委員会の人と先生とみたいな話だったんで、実際のスクールカウンセラーさんの話を聞きたかったなと思って
Cさん	C3	クリニックだったら多分ソーシャルワーカーさんとか、教育委員会だったらその教育委員会の職員の方の話を聞けたのは良かったんですけど、やっぱり実際働いている心理師さんの話をもう少し聞ける場面があったら良かったなっていうふうに思う

3) 自己理解のための体験の実習

Eさん	E4	現実的にできるかはともかくその支援の活動の時に学生も参加できるみたいなことがもし可能だったら、よりその自分が将来心理職として働くってなった時に自分がどんなことができるかとか、そういうことをいろいろ考える材料になるかなと思いました
	E5	実際にその施設の利用者の方と触れ合うことで、自分がその人に対してどんな風に話とか関わりが持てるのかみたいなことかですね。自分が関係性を作るための力みたいなのを自分がどんな風に持っているのかなみたいな。なんかそんなん知れるかなって

4) 段階的実習の希望

Cさん	C5	最初は本当になんか実習っていうからには、もうなんか例えば看護の実習とかいうイメージがあったので。まあでも実際は見学っていう感じだったので、なんか全然がっかりとかではなくて正直ホッとしたのがあって。いきなり現場に入るのではなくて、まず見学っていう形から入る方が段階的に緩やかでいっかなって思ったのがあって、最初に現場知って、あ、こういう風にこういう所で働いてるんだっていうのを最初に緩やかに知ってから、大学院で実際の現場に実習として行くっていう方が緩やかでなんか自分のメンタル的にも良かったなって
-----	----	---

5) 臨床現場のニーズの理解

Hさん	H6	他の職種さんが心理師さんをその組織の中というか、機関の中でどう見ているのかっていうのももうちょっと知りたかったかもしれないです
-----	----	---

しょうがないんですけど、なんかこれから心理って職場とかに入っていけたらいいなって思っているの。そういう実際職場とかで心理師がどういうことをやっているのかっていう、実際の現場を見れたら良かったなって」(C4)と述べていた。Dさんは、「一番いいのは実際にどう活動しているかを見れたらよかったのかなっていうのがありますかね。実際、そこの利用者さんとかと対応している姿とかを見れたら、まあ実際にやってないとはいえ、ある程度現場の雰囲気も感じることができるし。自分がもし教育の分野で働きたいと思ってて、医療現場のそういうのを見たら、またちょっと自分の考えが変わるかもしれない、そういうきっかけとかになるなと思うんで。だから、実際に働いている姿を見れたら良かったかな」(D3)と述べていた。Fさんは、「もうちょっとどういう介入しているとか、どういうオリエンテーションをその機関は引き継いで関わっているのかみたいな形があるのを知れたら良かった」(F3)と述べていた。Gさんは、「講義でこんな感じですよって言われてその写真だけを見てる状態じゃイメージがつきづらいので、そういう意味で実際に現場っていうのを見せてもらえたら、もう少し学べたのかなっていうのはあります」(G3)と述べていた。Hさんは、「芸術療法とかその他のなんかその心理療法じゃないんですけど、ちょっとメインではないんですけど音楽療法とかそういうのもなんか福祉領域では老人ホームとかでその音楽療法やってたりしたら、そういうのもなんか学べたらいいなとか」(H5)と述べていた。

2) 心理師からの話

『心理師からの話』については以下の通りであった。

Aさんは、「スクールカウンセラーさんの話がなかったような気がします。なんか教育委員会の人と先生とみたいな話やったんで、実際のスクールカウンセラーさんの話を聞いたかったなと思って」(A3)と述べていた。Cさんは、「クリニックだったら多分ソーシャルワーカーさんとか、教育委員会やったらその教育委員会の職員の方の話を聞いたのは良かったんですけど、やっぱり実際に働いている心理師さんの話をもう少し聞ける場面があったら良かったなっていうふうに思う」(C3)と述べていた。

3) 自己理解のための体験的学習

『自己理解のための体験的学習』については以下の通りであった。

Eさんは、「現実的にできるかはともかくその支援の活動の時に学生も参加

できるみたいなことがもし可能だったら、よりその自分が将来心理職として働くってなった時に自分がどんなことができるかとか、そういうことをいろいろ考える材料になるかなと思いました」(E4)や、「実際にその施設の利用者の方と触れ合うことで、自分がその人に対してどんな風に話とか関わりが持てるのかみたいなこととかですね。自分が関係性を作るための力みたいなのを自分がどんな風に持っているのかなみたいな。なんかそんなん知れるかなって」(E5)と述べていた。

4) 段階的実習の希望

『段階的実習の希望』については以下の通りであった。

Cさんは、「最初は本当になんか実習っていうからには、もうなんか例えば看護の実習とかいうイメージがあったので。まあでも実際は見学っていう感じだったので、なんか全然がっかりとかではなくて正直ホッとしたのがあって。いきなり現場に入るのではなくて、まず見学っていう形から入る方が段階的に緩やかでいっかになって思ったのがあって、最初に現場知って、あ、こういう風にこういう所で働いてるんだっていうのを最初に緩やかに知ってから、大学院で実際の現場に実習として行くっていう方が緩やかでなんか自分のメンタル的にも良かったなって」(C5)と述べていた。

5) 臨床現場のニーズの理解

『臨床現場のニーズの理解』については以下の通りであった。

Hさんは、「他の職種さんが心理師さんをその組織の中とか、機関の中でどう見ているのかっていうのももうちょっと知りたかったかもしれないです」(H6)と述べていた。

3-4. 実習体験の影響

『実習体験の影響』は、『進路選択への影響』、『働くイメージ』、『心理実践実習への連関性』、『実習先指導者等とのやりとり』、『臨床現場におけるルール』の5つのカテゴリーが抽出された。その結果を表7にまとめた。

1) 進路選択への影響

『進路選択への影響』については以下の通りであった。

Aさんは、「実際に現場とか話し聞いて、やっぱ思ったよりすごい大変そ

表7. 実習体験の影響

1) 進路選択への影響

Aさん	A6	実際に現場とか話し聞いて、やっぱり思ってたよりすごい大変そうやなっていう、なんでしょうね。結構覚悟しないとかあかんっていうのはあったんですけど。でも、まあ現場とかを見て、より心理師になりたいなっていうのはしんどそう大変そうっていうのはあるんですけど、それでもやっぱり実際に働いている人の話を聞いて、あー、自分もこういう仕事したいなっていうのを改めて思ったかなと思います
Dさん	D4	リワークの方に興味があって、その方に進みたいなって思うぐらい自分の進路のある程度指針になってくれるのかって感じがありますかね。なんて言うんやろう。漠然と医療分野、教育分野、福祉分野って大きく3つあって、そこに基本的には進むっていうことが多かったと思うんですけど、その中でも特にどういう分野のさらにどこっていうところを勉強できたのがすごい良かった
Eさん	E6	どういう風に自分の働く現場を考えていくのかっていう時に、この見学したりお話を聞いたりっていう体験で自分がどんなことをしたいのかっていうのと実際に現場はどんなふうになっているのかっていうのを考えるための材料として生かせるかなと思いました
Hさん	H8	医療っていつでも色んな働き方があると思うので、どこで仕事をしたいとか、そういうなんか将来の目標みたいなことができました

2) 働くイメージ

Cさん	C6	心理師の働く現場っていうところを実際に見れて自分の働くイメージがつかめたかなっていうふうには思います
Eさん	E7	精神科の精神科医の方とか復職支援をしている方とかがいて、実際にどんな働きをしているのかってことも知ることで、もし自分が今後それぞれそそ心理職として働くってなったら全部がそうじゃなくて、一個の例ではあると思うんですけど、こういう風に働くっていうことが具体的なイメージとして持てたかな
Hさん	H7	心理師さんが現場でどんな働きをしているかって漠然としたイメージしか実習行く前ではなくて、実習に行ってみたら実際の心理師さんってなんかすごいハキハキしてて社交的でって感じで、なんだらう、すごい色々な人の役に立てるようなことをしてらっしゃってて。どこの現場でもそうなんですけど、自分からそういう関係性を築いていかれてっていうところに魅力を感じて、自分も同じように関係性をこう和気あいあいとした感じの関係性を築いていきたいなとか

3) 心理実践実習への連関性

Cさん	C7	大学院でその実習行っていく時もイメージしやすくて。あ、こういうところで実習先行くんやっていう、なんか初めて行く不安とかがちっと軽減されたかなっていうのはあります
	C8	例えば大学院の講義とかでなんかクリニックで働いた時にこういう事例がありましたって感じで、その事例について検討するみたいな時も結構イメージしやすいってというか、実習先で行ったクリニックを思い浮かべて、ああ、こういう所でこういう事例があるんなかみたいなイメージがしやすくなったかな
Fさん	F4	修士に行くっていう前提でいたので、外部実習先への対応というか、自分がどうあるべき形で実習先に臨んでいくのかとか、失礼のないようにするにはどうしたらいいのかとかいう人間的なことみたいなところは前提として身につけたんじゃないかなって

4) 実習先指導者等とのやりとり

Aさん	A5	例えば多職種連携とかよりも実際にその看護師さんとかお医者さんとか心理師さんとかが話す多職種連携の方がリアルってというか、リアルな感じで開けて、質問とかも結構こういう時にどうすればいいですかとか、例えば意見が対立した時にとかだったら、結構病院とかによってもいろんな意見があるので、それはやっぱりえっと何でしょう、考えが結構その心理師の役割ってというのが結構理解が深まったかなって
Bさん	B4	現場の人にこれから自分たちが将来仕事に就くとして、まあ、そういった業界で、領域で働くとして、こういうことはこうんじゃないかと思ってるんですけどっていうふうには言える機会があったので。そこですごく深い、熱心な反応いただいたっていうのはすごい学びの中で貴重な経験やったかなっていうふうには思ってます

5) 臨床現場におけるルール

Gさん	G4	実際の現場に入る時にどういう配慮が必要というか、その職場に入る時に人と情報共有する時にどうしたいか
-----	----	---

うやなっていう、なんでしょうね。結構覚悟しないとあかんっていうのはあったんですけど。でも、まあ現場とかを見て、より心理師になりたいっていうのはしんどそう大変そうっていうのはあるんですけど、それでもやっぱり実際に働いている人の話を聞いて、あー、自分もこういう仕事したいなあっていうのを改めて思ったかなと思います」(A6)と述べていた。Dさんは、「リワークの方に興味があって、その方に進みたいなって思うぐらい自分の進路のある程度指針になってくれるのかなっていう感覚はありますか。なんて言うんやろう。漠然と医療分野、教育分野、福祉分野って大きく3つあって、そこに基本的には進むっていうことが多かったと思うんですけど、その中でも特にどういう分野のさらにどこにっていうところを勉強できたのがすごい良かった」(D4)と述べていた。Eさんは、「どういう風に自分の働く現場を考えていくのかっていう時に、この見学したりお話を聞いたりっていう体験で自分がどんなことをしたいのかなっていうのと実際に現場はどんなふうになっているのかなっていうのを考えるための材料として生かせるかなと思いました」(E6)と述べていた。Hさんは、「医療っていっても色んな働き方があると思うので、どこで仕事をしたいとか、そういうなんか将来の目標みたいなことができました」(H8)と述べていた。

2) 働くイメージ

『働くイメージ』については以下の通りであった。

Cさんは、「心理師の働く現場っていうところを実際に見れて自分の働くイメージがつかめたかなっていうふうには思います」(C6)と述べていた。Eさんは、「精神科の精神科医の方とか復職支援をしている方とかがいて、実際にどんな働きをしているのかっていうことも知ることができて、もし自分が今後それこそ心理職として働くってなったら全部がそうじゃなくて、一個の例ではあると思うんですけど、こういう風に働くっていうことが具体的なイメージとして持てたかな」(E7)と述べていた。Hさんは、「心理師さんが現場でどんな働きをしているかって漠然としたイメージしか実習行く前はなくて、実習に行ってみたら実際の心理師さんってなんかすごいハキハキしてて社交的っていう感じで、なんだろう、すごい色んな人の役に立てるようなことをしてらっしゃってて。どこの現場でもそうなんですけど、自分からそういう関係性を築いていかれてっていうところに魅力を感じて、自分も同じように関係性をこう和気あいあいとした感じの関係性を築いていきたいとか」(H7)と述べていた。

3) 心理実践実習への連関性

『心理実践実習への連関性』については以下の通りであった。

Cさんは、「大学院でその実習行くっていう時もイメージしやすくて。あ、こういうところで実習先行くんやっていう、なんか初めて行く不安とかがちょっと軽減されたかなっていうのはあります」(C7) や、「例えば大学院の講義とかでなんかクリニックで働いた時にこういう事例がありましたっていう感じで、その事例について検討するみたいな時も結構イメージしやすいっていうか、実習先で行ったクリニックを思い浮かべて、ああ、こういう所でこういう事例があるのかなみたいなイメージがしやすくなったかな」(C8) と述べていた。Fさんは、「修士に行くっていう前提でいたので、外部実習先への対応というか、自分がどうあるべき形で実習先に臨んでいくのかとか、失礼のないようにするにはどうしたらいいのかとかいう人間的なことみたいなところは前提として身につけたんじゃないかなって」(F4) と述べていた。

4) 実習先指導者等とのやりとり

『実習先指導者等とのやりとり』については以下の通りであった。

Aさんは、「例えば多職種連携とかよりも実際にその看護師さんとかお医者さんとか心理師さんとかが話す多職種連携の方がリアルっていうか、リアルな感じで聞けて、質問とかも結構こういう時にどうすればいいですかとか、例えば意見が対立した時にとかだったら、結構病院とかによってもいろんな意見があるので、それはやっぱりえっと何でしょう、考えが結構、その心理師の役割っていうのが結構理解が深まったかなって」(A5) と述べていた。Bさんは、「現場の人にこれから自分たちが将来仕事に就くとして、まあ、そういった業界で、領域で働くとして、こういうことはこうなんじゃないかと思ってるんですっていうふうに言える機会があったので。そこですごく深い、熱心な反応いただいたっていうのはすごい学びの中で貴重な経験やったかなっていうふうに思ってます」(B4) と述べていた。

5) 臨床現場におけるルール

『臨床現場におけるルール』については以下の通りであった。

Gさんは、「実際の現場に入る時にどういう配慮が必要というか、その職場に入る時に人と情報共有する時にどうしたらいいか」(G4) と述べていた。

4. 考察

4-1. 心理実習を通した学生の多様な学び

本研究より、学生は心理実習の学びとして、『臨床現場のイメージの変化』、『臨床現場のニーズの理解』、『臨床現場の実情』、『臨床現場のイメージ化』、『臨床現場におけるルール』、『多職種との関わり方』といったことを学んでいることが分かった。このことから、学生は多様な学びを心理実習を通して得ていることが分かった。

3名の調査対象者は心理実習を通して、『臨床現場のイメージの変化』を学んでいた。Dさんは、産業領域における心理支援の実習を通して、大企業においては想像以上に早くから心理支援が行われていたことや産業領域における心理支援の位置づけを知ることで新たな視点を手に入れていた。また、Fさんは心理実習を経験したことで想像していた心理師の業務内容は実際の業務内容の一側面であり、カウンセリング以外の業務もあることに気づくことができたことを述べていた。Hさんも同様に、「心理師さんがずっとカウンセリングとか心理検査ばかりしてるのかなと思ってたんですけどそうじゃないし、なんか他にもいっぱい役割を持ってらっしゃって」(H4)と述べていた。このことから、心理実習が良い意味でそれまでの学習内容を裏切り、実際には働く環境によって多様な実践方法があり、日常の様々な業務内容にも組み込みながら心理支援を行っていることに気づく機会になったと考えられる。また、Hさんは「実際に現場に行ったら本当に心理師さんとお医者さんが仲良かったり、友達のように仲良かったりしてたので、なんか多職種でもこうすごい和気あいあいとしている関係性の職場もあった」(H3)と述べていた。多職種連携やチームアプローチが公認心理師では求められているが、それらが機能する前提として心理師がどのように多職種と何気ない日常の会話を交わし、関係を構築しているのかといったことを観察することも重要な心理実習の学びといえる。そのためには、心理実習の主要な実習内容ではないかもしれないが、心理実習中の何気ない一コマ一コマの心理師と多職種とのやり取りや実習中に感じる職場内の雰囲気などにも意識を向けられるように指導しておくことで、多職種連携やチームアプローチの前提となる基本的な人間関係のあり方について学びを深められるのではないかと考えられる。

また、心理実習での学びとして、『臨床現場の実情』や『臨床現場のイメージ化』の他に、『臨床現場のニーズの理解』や『臨床現場におけるルール』、

『多職種との関わり方』といったことも学んでいた。臨床心理士教育ではほとんど指摘されてこなかった多職種連携やチームアプローチについて、公認心理師では心理実習に含まれる事項としてこれらの学びの修得自体が求められている（文部科学省・厚生労働省、2017）。本研究からも、Aさんが「先生とかが心理師に何を求めているのかみたいな話があったりした時に、あ、こういうことを求められてるんだなみたいな」（A2）と述べており、Eさんも「心理職がどんなことを求められているのか、どんな働きが求められているのかっていう風なことを知ることができた」（E3）と述べており、多職種と連携を図るために心理師は何を求められているのかという視点で実習に臨んでいたことが明らかとなった。また、Hさんが「多職種連携と言ってもその皆が、そのいろんな個性豊かなメンバーがいるので、心理師さんがその中でどううまくやっていくかっていう伝え方とか接近の仕方とか、そういう事を調整されながらやってるっていうのを現場の心理師さんからもお伺いしたりしたので、そういうこと自分も考えていかないといけないって」（H2）と述べているように、心理師からも多職種との関係作りについて学びを得ていた。これらのことから心理実習であっても心理師からの実習指導のみを行うのではなく、可能な範囲で多職種からも実習指導を受けられるような実習環境を整備することで、要支援者だけでなく要支援者を取り巻く環境や関係者のニーズ、専門性も考慮に入れた心理支援のできる心理師養成につながるのではないかと考えられる。吉川（2009）は、協働的な援助においては互いの専門性を共有することが必要であり、そのためにはその専門性を持っている人の特性を知ることが不可欠であると述べている。心理実習の段階から多職種と関わる機会を設けることで、多職種に関心を持ち、関係者と適切にコミュニケーションを図ることのできる心理師を養成していくことがこれからの時代には必要不可欠と考える。

4-2. 心理実習での学びを通した影響

心理実習での学びの分析から、『実習体験の影響』として『進路選択への影響』、『働くイメージ』、『心理実践実習への連関性』、『実習先指導者等とのやりとり』、『臨床現場におけるルール』が見出された。

これらの中でも特に心理実習での学びは『進路選択への影響』や『働くイメージ』、『心理実践実習への連関性』といった大学卒業後の将来に影響を与えていることが分かった。永田（2022b）は心理実習が心理職として働く上での社会モデルの場になると述べ、心理実習を通して学生が心理師としてのアイデ

ンティティを形成し始め、心理師の働き方を知ることで心理職としての自己イメージにつながることを述べている。Aさんの「しんどそう大変そうっていうのはあるんですけど、それでもやっぱり実際に働いている人の話を聞いて、あー、自分もこういう仕事したいなあって」(A6)やDさんの「漠然と医療分野、教育分野、福祉分野って大きく3つあって、そこに基本的には進むっていうことが多かったと思うんですけど、その中でも特にどういう分野のさらにどこにっていうところを勉強できた」(D4)と述べていることから、本研究においても心理実習での学びは学生の進路選択を考える一つの指標になっていることが明らかとなった。Eさん(E6)もHさん(H8)も同様に自分自身がどのように働きたいのか、どのような分野や職場で働きたいのかといったことを考える機会になっていたことを述べており、心理実習が進路選択に影響を与えていることが分かる。

また、Cさんは「心理師の働く現場っていうところを実際に見れて自分の働くイメージがつかめたかな」(C6)と述べている。Eさんも「もし自分が今後それこそ心理職として働くってなったら全部がそうじゃなくて、一個の例ではあると思うんですけど、こういう風に働くっていうことが具体的なイメージとして持てたかな」(E7)と述べており、実際に実習現場に赴くことで頭の中でイメージしていた心理師の働く環境や働き方が整理され、将来自分自身が心理師としてどのように働くのか、その働くイメージにつながっていたと考えられる。Hさんも「実習に行ってみたら実際の心理師さんってなんかすごいハキハキしてて社交的でっていう感じで、なんだろう、すごい色んな人の役に立てるようなことをしてらっしゃってて。どこの現場でもそうなんですけど、自分からそういう関係性を築いていかれてっていうところに魅力を感じて、自分も同じように関係性をこう和気あいあいとした感じの関係性を築いていきたい」

(H7)と述べていた。学生にとって身近な心理師は大学教員であろうが、大学教員は教員であって臨床現場の心理師として出会っているわけではない。したがって、心理実習において初めて臨床現場の心理師と出会い、さまざまな臨床現場で働いている心理師の活動の実際を目の当たりにすることとなる。そのため、心理実習というのはこれまでの学びと実践を結びつけるだけでなく、将来の進路選択や自分自身が将来目指そうとする理想の心理師像との出会いの場にもつながっているといえる。吉岡(2019)は実習を「専門家になるキャリアパスを考える貴重な機会」と指摘しているが、本研究からも同様のことが考えられる。したがって、心理実習のあり方として、可能な限り多様な実習現場や

多様な心理師をはじめとした関係者との出会いの場を実習内容に取り入れることで、学生の将来への可能性を広げてゆける心理実習を検討していくことが重要と考えられる。

また、これらの進路選択や働き方のイメージと同時に心理実習は大学院における「心理実践実習との連関性」にも影響を与えていた。Cさんは「大学院でその実習行くっていう時もイメージしやすくて。あ、こういうところで実習先行くんやっていう、なんか初めて行く不安とかがちょっと軽減された」(C7)、「事例について検討するみたいな時も結構イメージしやすい」(C8)と述べており、Fさんも「修士に行くっていう前提でいたので、外部実習先への対応というか、自分がどうあるべき形で実習先に臨んでいくのかとか、失礼のないようにするにはどうしたらいいのかとかいう人間的なことみたいなところは前提として身につけた」(F4)と述べていた。先述したように公認心理師を目指す場合には大学を卒業後、大学院へ進学するルートが基本となっている。波田野(2019)は心理実践実習での内容をケースからの学びとしているが、そのための基礎として心理演習と心理実習があることを指摘しており、大学から大学院への学びの連続性を指摘している。本研究においても心理実習での学びが心理実践実習での学びの導入に繋がっていることが明らかとなった。これらのことから心理実習のあり方として、学生が心理師としてのアイデンティティを形成していくためのレディネスを高め、心理実践実習での学びにつながる連関性を持った実習カリキュラム構成の検討が重要であると考えられる。

4-3. 学生が心理実習に期待するもの

学生の実習に対する期待と実際に学んだことのズレとして、『臨床現場の観察』、『心理師からの話』、『自己理解のための体験的学習』、『段階的実習の希望』、『臨床現場のニーズの理解』があることが明らかになった。これらの中でも多く語られていたのが、心理師が多職種や実習施設利用者に実際に関わっている場面や実習施設利用者の様子を少しでも観察したかったということである。『実習に対する期待』においても『臨床現場の観察』が述べられており、学生にとっては実習施設の職場環境だけでなく、その実習施設の日常をそのまま観察したいという思いがあると言える。

期待と学びのズレとして、Aさんは「子どもがいない時間とかになると実際のまあ話は色々聞けるんですけど、実際のどういう様子なんかなってというのは、あんまり、まあ現場見て教えてもらってるんで、分かりやすいつちゃ分かりや

すいですが、イメージはそのあまりしにくいついていうか難しい」(A4)と述べ、Bさんは「実際にそこの施設が稼働している様子っていうのは学部の内に見れたら、それほど贅沢なことはなかったのかな」(B3)と述べ、Cさんは「実際職場とかで心理師がどういうことをやっているのかっていう、実際の現場を見れたら良かったな」(C4)と述べていた。

文部科学省・厚生労働省(2017)は、心理実習の実施方法について「見学等による実習」としている。この見学等をどのように捉えるかによって各大学の心理実習プログラムは異なってくると思われるが、今回の研究結果を踏まえれば講義や施設の見学だけでなく、実習施設の日常の見学までを取り入れることが学生にとっての学びになると考えられる。

また、Eさんが「実際にその施設の利用者の方と触れ合うことで、自分がその人に対してどんな風に話とか関わりが持てるのかみたいなこととかですね。自分が関係性を作るための力みたいなのを自分がどんな風に持っているのかなみたいな。なんかそんなん知れるかなって」(E5)と述べているように、可能であれば実習施設の日常の見学だけでなく、実習施設利用者との関わりも取り入れることができればより学びを深められる可能性がある。その結果、より自己理解を深め、職業選択や働くイメージの形成につながると考えられる。

しかしその一方で、永田(2022b)が心理実習を受け入れることは実習施設側の負担も大きく、そのことを踏まえた実習指導案の検討が必要であると述べているように、一度に実習を行う学生数の課題や学生が実習施設利用者に関わることによる影響など検討すべき事柄も数多くある。加えてCさんが「いきなり現場に入るのではなくて、まず見学っていう形から入る方が段階的に緩やかでいっかなって思ったのがあって、最初に現場知って、あ、こういう風にこういう所で働いてるんだっていうのを最初に緩やかに知ってから、大学院で実際の現場に実習として行くっていう方が緩やかでなんか自分のメンタル的にも良かったなって」(C5)と述べていたように、学生によっては段階を踏みながら臨床現場に触れていく方が精神的に落ち着く場合もある。

今回のインタビュー対象者は、COVID-19による影響で心理実習の実施方法そのものにも影響を受けていた。そのため、実習先に訪問して行う実習そのものや関与観察による実習自体が制限されてしまった影響も考えられる。また、心理実習自体が見学等を基本としているため、施設利用者との直接的な関与は必ずしも求められてはいない。しかしそれでも、心理実習が将来の進路選択や心理師としてのアイデンティティ形成に影響していることを踏まえれば、可能

な範囲での要支援者との関わりも含めた心理実習プログラムを検討していくことが今後の心理実習にとって有用であると考えられる。

5. 結論

本研究では、心理実習を経験した大学院生を対象に、心理実習にどのような期待を持ち、どのような学びを得ていたのかを明らかにすることで今後の心理実習のあり方を検討した。その結果、学生は心理実習を通して多様な学びを得ており、心理実習の経験は心理実践実習に向けた下地となるだけでなく、将来の進路選択や働くイメージの形成にも影響を与えていることが分かった。その一方で、心理実習に対する期待と学びのズレとして、臨床現場や実習施設の日常の観察、要支援者との関わりといった実習内容を期待していることも明らかとなった。それらのことから今後の心理実習のあり方として、①チームアプローチや多職種連携を理解するために心理師だけでなく多職種からの実習指導も取り入れること、②将来の進路選択や働くイメージ形成のために実習施設の日常を観察すること、③自己理解を深めるために可能な範囲で要支援者と関わる関与観察実習を取り入れること、の3点を考慮に入れることが重要であると考えられた。

しかしながら今回の研究では、インタビュー調査の対象が心理実習を経験した大学院生のみとなっており、大学院へ進学しなかった者が含まれていない。そのため、大学院へ進学しなかった者に対しても同様に調査を行うことで、より多面的に心理実習のあり方について検討していくことが必要であると考えられる。

6. 参考文献

- 石田有紀・園田直子（2022）心理学科における公認心理師養成に向けた「心理実習（2021年度）」の現状と課題、久留米大学心理学研究、21、pp.43-50
- 一般財団法人日本心理研修センター（2022）公認心理師の都道府県別登録者数、http://shinri-kenshu.jp/wp-content/uploads/2022/10/number_of_registered_202210.pdf、2022.12.4
- 岩山孝幸（2021）「心理実習」に求められる学びのあり方について ―公認心理師カリキュラム等検討会・ワーキングチームの議論をもとに―、昭和女子大学生活心理研究所紀要、23、pp.115-122
- 岩山孝幸（2022）「心理実習」に求められる学びのあり方について（2）―ケア関連専門職の養成教育のあり方を参考にして―、昭和女子大学生活心理研究所紀要、24、pp.127-134
- 波田野茂幸（2019）放送大学における公認心理師養成に向けた「心理実習」の検

- 討、放送大学研究年報、37、pp.31-43
- 公認心理師カリキュラム等検討会（2017） 公認心理師カリキュラム等検討会報告書 厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokuyokushougaihovenfukushibu-Kikakuka/0000169346.pdf>、2022.12.4
- 文部科学省・厚生労働省（2017） 公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について、<https://www.mhlw.go.jp/content/000712061.pdf>、2022.12.4
- 永田忍・井芹聖文・林秀樹・堀田裕司・石原みちる（2022a） 公認心理師養成大学における「心理実習」導入初年度の取り組み、就実大学大学院教育学研究科紀要、7、pp.29-44
- 永田忍・林秀樹（2022b） 公認心理師志望学生の心理実習へのモチベーションに関する研究 ―学部学生の実習での体験に関する調査を通して―、就実教育実践研究、15、pp.1-10
- 上田琢哉・田中里実・横山舜（2022） 公認心理師養成カリキュラムにおける心理実習運用の現状と課題、教育人間科学部紀要、13、pp.117-137
- 吉川悟（2009） マクロとしてのアセスメント、吉川悟（編）、システム論から見た援助組織の協働―組織のメタ・アセスメント―、金剛出版、pp.264-284
- 吉岡久美子（2019） 心理専門職養成に係る「心理実践実習」「心理実習」の現状と今後の展開、福岡大学研究部論集B：社会科学編、11、pp.39-42

キーワード 心理実習、学びと期待、大学生